県内ワイド

元気よ、届け

日赤県支部・被災地便り

日赤県支部
総務課長
山本裕行さん

礼節持って温かく対応

気を使う言葉

東日本大震災から間もなく三カ月。いまだ一万人近くが行方不明のままで、多くの人ががれきの街で、肉親捜しに歩いている。

避難所の掲示板には、発災翌日から貼られた安否確認を呼び掛ける手製のチラシ。日の経過とともにはがれかかりながらも、それでも途切れることなく貼り続けられている。

行方のわからない家族の名前を大きく書き、「探しています。情報を知っている方、教えてください」と、自身の連絡先が記されているものばかり。添ゆるんでくるが、被災付された、幼子を抱いている父親や、家族だんらんの写真などが、切実な思いを訴えかけてくる。

震災発生から数カ月地から支援の手が入っているだけに、問題となるのが「方言」だ。

先日も、こんなことがあった。巡回診療先で先に部屋に入った要員が、もう一人に福井弁で「はよ、しねー」と声をかけた。東北の人には「早く、死ね」と受け取られたのだろう。はっと気づき、周囲の人たちに説明すると笑い話に変わったというこの時期。発生直後の緊張感は徐々に

者の心の傷は深く、われわれ救護班はかける言葉一つにも、よりいっそうの気を張らなければならない。全国各

が、反省させられる一こまだった。

汚い話になるが、トイレを使ったとき、ちょっと臭ったので、思わず「アッパくさい」と言ってしまった。これは東北の人にとっては「お母さん、くさい」の意味。

救護所や巡回診療などで避難住民たちを診る際、徳島弁では体調の悪い人は「せこい人」、富山弁では問題ない人は「つかえんぐ人」だ。

「ケガされたんですね」を、福井弁「あやまちされたんですね」と言えば、過ちを犯したと疑っているように伝わる。「おごってあげる」を富山弁の「だいてやる」と言ったら、セクハラと思われかねない。「道が込んでいた」を三重弁で「車つんどった」と笑いながら話せば、津波で建物に車が乗り上げていることを笑っているように誤解を招いてしまう。

避難住民の話をじっくりと聞く福井赤十字病院の西村智恵子看護師長㊨＝5月25日、宮城県石巻市雄勝地区内の巡回診療先で

被災者が不快になるような言動は慎むこと。礼節を持って温かく対応し、言葉の使い方には十分気をつけることも、われわれの任務。また、被災者の不満やストレスは、時としてわれわれ救護班に向けられることがある。しかしこれは、正常なストレス反応であり、落ち着いて聞き役に回り、とことん話を聴くことが大切となる。

被災者は、思いのたけを言葉にするだけで、たとえ激高したとしても気持ちが晴れる。どんな時も冷静に対応し、謙虚でひたむきに接すること。これが、われわれに求められている。